

Takashi AKIYAMA Poster Museum Nagaoka

2014-12-15

APM news 112

秋山孝ポスター美術館 長岡

歴史的建造物・金庫扉と雁木のある美術館 (旧北越銀行宮内支店)

第25回美術館大学 8月5日(土) pm4:00~5:30/受講者:93名

「もりもり鼎談:2013年度日本建築学会北陸支部
文化賞2作品(マルの杜とリブチの森)について」



講師: 山下秀之
高田清太郎
秋山孝

〒940-1106 新潟県長岡市宮内2-10-8
TEL 0258-39-1233



通常、火曜日は秋山孝ポスター美術館長岡 (APM) の休館日であるが、この日は特別開館日として第25回美術館大学を開催した。講師に長岡造形大学建築・環境デザイン学科教授・山下秀之氏、株式会社 高田建築事務所代表取締役社長・高田清太郎氏を迎え、「もりもり鼎談:2013年度日本建築学会北陸支部 文化賞2作品(マルの杜とリブチの森)について」と題し、両氏がそれぞれ受賞した作品についてお話いただいた。進行は、当館館長・秋山孝が務めた。参加者は建築に関わる人が大多数を占め、非常に専門性の高い内容となった。

まず、高田氏にまちづくりをする上での考え方と今回の受賞作品「リブチの森」について語っていただいた。高田建築事務所ではまちづくりを「間知(まち)づくり」と表記している。それは、まちづくりの上で「間」というものが重要であると考えからだ。高田氏は「居場所探しの旅」が人間の生きる上でのテーマであると言う。快適な居場所というものは、距離感と方向の関係で決まる。適度な距離感と、建物を建てる向きに少し角度をつけることで、プライバシー空間を確保し、そこで暮らす人々にとって心身共に健康的な空間を作り出すのだ。その考え方の下、作り出されたのが「リブチの森」である。「自然との共生」「歴史との共生」「人々の共生」という3つのコンセプトを掲げ、この土地の特性と歴史を活かしながら、人々が居心地良く共生するまちを作り続けている。この短時間では語り尽くせない程のこだわりが詰まったまちであるということが、高田氏の語る姿からピンピンと感じられた。

次に山下氏から、氏の中にある影響を受けた建築家の紹介と受賞作品「MaRou (マル) の杜」の構造および建築工程に関してお話いただいた。「マルの杜」は山下氏が教授を勤める長岡造形大学の敷地内に建設された、長岡市出身の画家・丸山正三氏の作品を展示および収蔵する施設である。この建物は、正方形の中に十字形を重ね合わせた空間である。互いの中心をずらし、一方を18度回転させて角度をつけることで、分割された空間が生み出されている。鑑賞者はその空間を移動しながら作品を鑑賞する。その空間を巡るという行為が、まちを巡るようなものとなる。「まちかどを作りたかった」と山下氏は語った。各空間に個性が生まれ、展示計画を考えることが職員の楽しみの1つになっているという。

秋山館長は、高田氏の「まちづくりの上で塀をつくらない」という話から、まちという物は人と土地を共有することであり、塀というものは国境のようなものである。しかし、そのようなものは概念としては存在するが、現実の生活には無い。その事を人々が認識し、境をつくらずに共有することで、良いまちづくりができるのであろうと述べた。

今回の美術館大学は、建築家が持つ自分の想いを実現するための情熱やこだわりが垣間見える熱い講演であった。

(たかだみつみ・APM学芸員/APM公式ホームページより抜粋)